

P. A. ソローキン著、下程勇吉監訳
『利他愛—善き隣人と聖者の研究—』

広島大学教授・教育学博士

池田秀男

本書の著者 P. A. ソローキンの著書は、これまでも訳出されており、かつ社会学の分野では『社会移動』『社会的文化的動学』『現代社会学理論』など既に現代の古典的研究と呼ばれている諸著作を通して、しばしば引用され親しまれている。しかし彼が「ハーバード大学創造的利他主義研究センター」を1949年に創設し、それ以後晩年までその研究所長として「いかにして人間を非利己的にし、より創造的にするか」に関する研究に専心し、この方面で多くの注目すべき労作を発表していることについては案外知られていない。

ここに訳出された『利他愛—善き隣人と聖者の研究—』は、このソローキンの後半生を捧げた創造的利他主義に関する主著の1つである。本書の価値にいち早く着目し、ソローキンのこの方面の研究に取り組んでこられたのは、麗沢大学助教授細川幹夫氏であり、本訳書は、細川氏が監訳者の下程勇吉博士の指導のもとに、谷口茂氏、北川治男氏、岩佐信道氏、土屋武夫氏ならびに岡田雅行氏の協力を得て完成されたものである。

本書は、アメリカの「善き隣人」とキリスト教の「聖者」に関する社会学的研究である。本書はこの主題をめぐって3部から構成されている。

まず第一部で、利他的な人間の典型的特性があるとすれば、それは何か、

また彼らはどのようにして利他的になったのか——この問題に対する解答を求めてアメリカの「善き隣人たち」の集団的構成や特性および生成の過程を実証的に明らかにしている。

「善き隣人たち」は、「至高の道徳的価値体系と正・邪に関する深い倫理的確信をもった人であり、かつその確信の命ずることを実践する人である。」(89頁) 彼らの利他主義は地味で日常的であり、何の法的義務や道徳的責務さえもつことなく、また何の利益や恩典さえも期待することなく、彼らの仲間に関心からの援助を与えている。このような地味な善行が社会の道徳的基盤を作っている。一人ひとりの愛の貢献はつましやかだが、総体として彼らは莫大な量の「愛のエネルギー」を社会に供給している。(13頁) どんな福祉国家や民主的な諸制度も、「善き隣人たち」と彼らの善行がなければ、社会のある種の要請を十分に満たすことはできない。制度や政策は、「遅すぎ」たり「不十分」であったり、形式的であり、人々のあらゆる要請を満たすことはできない。「善き隣人たち」の活動は、親族や公的奉仕機関の手のとどかぬ間隙に愛の手をさしのべ、それらの活動を補足している。(52頁) 彼らは絶望と孤独にある人々に同情と理解を示し、悲しみにくれる人を勇気づけ、退屈と無気力におちいっている人に生氣を与え、ある場合には身体の話をして、ある場合には必要な物資を提供している。(54頁)

このような善行を行う「善き隣人たち」は、集団として見ると、どんな人々の集合体であり、善隣性や幸福や世界に対してどんな考えや態度をもち、どんな人々を対象にどんな活動を行っているのか。彼らの出身や集団帰属や家族生活や社会的、職業的地位や人間関係はどんな特徴があり、彼らは性別、年齢別、地域別にどんな構成をもっているのか。さらに彼らの善隣性はどんな要因に由来し、彼らはどんな人生経験を通して「善き隣人」になったのか。

これらの実に多面的側面から「善き隣人たち」の本質的特性を明らかにしたのが、本書の第一部である。この第一部における地味で日常的な利他主義者の研究に対して、本書の第二部は「聖者」、すなわち「偉大な利他主義者」

であり、「社会の最高の善・最高の愛・最高の精神性の生きた顕現」であり、「道徳上の価値の領域における創造的な英雄であり、その生きた鑑」であり(257頁)、カトリック教会によって聖列に加えられた「聖者」集団の諸特性や生成過程の解明にあてられている。

「聖者」に列せられた人々はどんな階級の出身であり、どんな性別、年齢別、国籍別の構成から成り、どんな結婚状態にあり、聖者が聖者への道に入る上での親の影響はいかようであり、何が根本的影響力をもったのか。(184頁) 聖者が聖者になる人生の過程はどういったものであり、どのような社会的文化的環境において聖者は聖者らしくなったのか。(217頁) さらに、聖者が聖者になることに成功した自己変革の技術は何であったか。(224頁) 聖者に列せられた人々はどんな社会的職業的地位を占めていたか。また聖者の内面的生活はどんな型の内面的文化に支配されていたのか。聖者の寿命はどうであり、どの世紀にどんな聖者が出現し、それにどんな要因や条件が作用していたか、聖者の出現数は全世紀を通じてどんなに変動し、現在にはどんな展望があるのか。

第二部では、これらの聖者に関する諸特性の解明から、聖者の本質と生成の過程の秘密を明らかにしようとしている。そして第三部では、第一部での善隣性の解明と第二部での聖者性のそれとを受けて、「全篇の要約」と「利他愛の意味」に言及して本書の結びとしている。

ソーキンはこれら一連の問題に関する研究の結果、どんなことを明らかにしているのだろうか。この面についても概要の紹介は無駄ではなかろう。

彼の研究結果によると、アメリカの「善き隣人たち」は約75%が女性であり、約70%は30歳から60歳までの中年であり、彼らの圧倒的多数は心の明朗な平和の持主であり、意味のある幸福な生活を営んでいる。彼らの70%以上は、よくまとまった家庭で両親と家族の愛情にめぐまれ、非常に幸せな幼年時代を送っている。そして現在その多くは結婚し、調和のとれた幸福な家庭をもっている。彼らの大部分は中間層に帰属し、学力は平均人と変わらないが、人間と環境に対して好意的・楽天的態度をもち、身近かな人々と親交

をもっている。「善き隣人たち」の90%以上は、破局や回心を経験することなく、穏やかに成長して利他主義的になっている。利他主義の形成要因は、第一に、善良でまとまりのある愛に満ちた家庭であり、第二に、社会的文化的環境によって強化された教養に富む普遍的経験であり、第三に、宗教であり、第四に、個人の自己変革的経験である。この形成要因の順位は、「善き隣人」集団全体の中で各要因が占めるウェイトの大きさに依拠している。それぞれのウェイトは29%、28%、21%、11%である。「善き隣人」を作る上で学校教育（8%）や書物（1%以下）の役割は、以上の4要因よりもウェイトが小さい。（102頁）愛が愛を生み、善き隣人たちが善き隣人たちを育てるのであり、「人間の真の社会化」にとって家族や身近かな環境は学校よりもはるかに重要なのである。（69頁）

これに対して、ローマ・カトリック教会の「聖者」の82%は男性であり、彼らは心の深い平和と人格の完全な統合によって一般の平均寿命よりもはるかに長寿である。彼らの約90%は両親の愛にいつくしまれ、少なくとも65%はその両親から聖者になる志を鼓舞されて育った。聖者の74.5%は結婚しておらず、彼らが真の聖者になり、神と合一するために完全な性的純潔が不可欠と見られていた。約62%のカトリック教の聖者と41%のロシア正教の聖者は、王侯貴族や上流貴族の出身であるが、1世紀から20世紀に至るにつれて、彼らの出身階層は上流から中流へと拡大され、かつ下流階級をも含むように変化している。聖者の75%から90%は教会の牧師職の地位にあり、教会内で高い地位を占める者が多かったが、歴史の動向は高位の教会聖職から低位の幅広い人々へと、その社会的地位を庶民化してきている。聖者は知的な面では平均人の部類に入るが、人間に対しては幼い頃から親切で好意的であった。聖者が聖者になった生活環境としては、普通の世俗的環境が最も多く（46%）、ついで精神的・道徳的に高潔になるために意図的に作られた僧院や修道院（31%）が多く、放浪者や巡礼者の方法（13%）および隠者的遁世や孤立化の状態（9%）において聖者性を身につけた者は少ない。歴史が新しくなるにつれて聖者は次第に修道僧的、隠者的でなくなり、日常生活の世界

にふみとどまりながら神の意志を行うようになってきており、かつての聖者の位置は徐々に「善き隣人たち」か、あるいは利他的・精神的な仕事をする人間にとって代わられつつある。（223頁）これらの外部の環境との関係で、聖者が聖者になるために内部の環境を統制する技術として用いたのは「禁欲のテクニック」であるが、次第に過度の難行苦行や自己苛責を避けて、自己統制の中庸を得た技術が優勢になってきている。これらの歴史的变化だけでなく、聖者の数そのものも1世紀から4世紀までは非常に多く、5世紀から16世紀まではそれがある程度まで維持されたが、最近の3世紀間は破局的に減少してきている。このような変動は、各時代の支配的な文化体系の性質と関係があり、最近の聖者の流水の涸渇化の傾向は「感性的文化」の出現に起因するものと見られる。

「善き隣人たち」と「聖者」の間には、性、年齢、社会的地位などにおいて対極的な諸特徴をもつが、利他性や聖者性はともに幸福な児童期と青年期の経験と人々の深い愛の「増殖力」によって、ちょうど草木が成長するように物静かに成長修得されていく。しかしその人間人格における善隣性と聖者性の発達は歴史社会の支配的な文化体系の性質によって拘束される。

本書では、これらのことが科学的に掘りさげ検討され、そこから一定の合法則性を導き出す努力がなされている。本書には単に「善き隣人たち」と「聖者」の多面的な諸特性の構造的解明にとどまらず、「善き隣人」となり、「聖者」となる要因や方法の分析も含まれており、その意味で本書は「善き隣人像」と「聖者像」の科学的外在的な解明と同時に、それぞれの集団に所属する人間人格の善と聖へ向けての形成過程ないし社会化に対してきわめて独創的な研究成果を提供している。

アメリカの「善き隣人たち」に関する分析は、約500名と93名と112名についての手紙文、自伝、質問紙、面接調査などによって収集された諸資料に依拠し、一方で記述説明の豊かな事例と他方で単純明確な統計操作に裏づけられている。「キリスト教・カトリックの聖者」に関する分析は、1世紀から20世紀に至るまでの間に聖列に加えられた聖者3090名の伝記から抽出処理され

た資料に基礎づけられている。そして善隣性と聖者性という精神文化的諸特性が、それらの諸特性をもつ人間の歴史社会的文脈と社会環境的諸条件との構造的関連において解明されている。ここに使用されている理論図式を顕在化すれば、一方で善隣性と聖者性を中核とする世界観や思考や倫理や「知識」の構造分析があり、他方で善隣性と聖者性の諸属性の外在的諸条件、例えば年齢・性・結婚・出身家族・社会的地位・国籍や都市・農村・集団所属の構造分析があって、前者の後者による「存在拘束的因果関係性」の記述説明だといえよう。かつてソローキンのハーバード大学での学弟R. K. マートンが恩師の学問体系を「知識社会学」として特徴づけたと同じ意味で、本書は方法論的には知識社会学ないし文化社会学の流れをくむものである。この方法は今から約50年前にマックス・ウェーバーによって先鞭をつけられ、その後カール・マンハイムが体系化したものだが、ソローキンは豊富な事例の質的記述説明と統計資料による量的説明を駆使することによって、知識と存在、上部構造と下部構造、内面的文化と歴史社会的文脈、との間の因果関係的結びつきを法則定立的科学の理論にまで高めようと努力している。そのさい、利他主義の単なる社会的存在拘束性のみでなく、聖者の分析に見られるように、歴史的な文脈による存在拘束性をも研究の視野に含めているので、事柄の社会学的原理や法則性と同時に歴史的展望が解析されるのである。しかし本書で使用している実証的資料の処理技術や操作は単純であって、今後この方面への多変量解析やパス解析の技術の導入などが期待されてよからう。

本書のもつこれらの独創的な意義や価値に加えて、最後に評者の読後感をそえるなら、本書の主題としてとりあげられたような人間性の善い面・明るい面、社会文化の積極面・創造面に関する研究書は、類書が少ないだけに、その与えるさわやかな印象と随所に出てくる金言や善行の説明を通して、研究者にとっても実践者にとってもよい清涼剤の役割をはたすに違いない。わが国でも現在、最も必要で最も不足しているのは本書の主題に関する社会科学的研究であるように思える。訳出はていねいで、わかりやすく、かつ下程勇吉博士と細川幹夫助教授の行きとどいた解説も付されている。共訳者の労

に対して敬意を表すると共に、私は本書を社会科学における「善の研究書」あるいは「善行のすすめ」として広く推奨したいと思う。

なお、ソローキンの著作でこれまでに訳出されているものを参考までにあげておくと、次のようである。『都市と農村——その人口交流——』ツインマーマンと共著（京野正樹訳）昭和15年、『ヒューマンティの再建』（北吟吉訳）昭和26年、『ソ連とアメリカ』（岡本順一訳）昭和28年、『テストマニア』（上田潤二訳）昭和31年、『アメリカの性の革命』（井上勇訳）昭和32年、『トインビー批判——その史観の発展のために——』ガイル、ドーソンと共著（山口光朔訳）昭和34年、『社会学の基礎理論——社会・文化・パーソナリティ——』上下（鷲山丈司訳）昭和36年、『権力とモラル』ランデンと共著（高橋正己訳）昭和38年など。読者はこれらを合わせ読まれるなら、本書の理解を深めるのに役立つであろう。

（広島大学教育学部教授）

広池学園事業部発行、昭和52年、A5判、本文311頁、2,900円